

京都府PTA協議会会長賞

「歴史が教えてくれたこと」

向日市立寺戸中学校 3年

甲 賀 壮 真



僕は昨年の一、向日市ふるさと検定を受験しました。僕のふるさとである向日市の歴史について、まだ学校で習っていない範囲も基礎から勉強しました。独学では難しい部分もあり、たいへん苦労しました。しかし、そのうち新しく知った事柄が元々知っていた知識と繋がっていくのが嬉しくなると、「もっと知りたい」と自然にテキストに手が伸びました。そんな中、僕が歴史を学ぶことの意味や面白さについて、前よりも奥深いところを知るきっかけとなった二つの事柄があります。

一つ目は、「地名」についてです。向日市の歴史に関する本を読んでいた時に、奈良時代の書物にも「物集女」という向日市の地名が書かれているのだと知りました。つまり、千四百年もの間受け継がれて来たということになります。また、向日市の名前の由来となった向日神社のもとであ

る「向（むかえ）神社」は平安時代中期の書物にも登場しているとも書かれていました。僕は心を揺さぶられました。千年以上も前の人が生み出した地名を、今、僕らが当たり前のように使っている。本当に素晴らしいことだと思いました。翌日、家族で出かけた時、道で「物集女」と書かれた看板を見かけました。いつも素通りしていた看板でしたが、その日は思わず立ち止まってしまいました。

僕が歴史を学ぶ意味と面白さを実感した二つの事柄は「遺跡の発掘」についてです。向日市には古墳や長岡京跡など、数多くの遺跡が点在しています。それらの発掘調査は今も続いています。日々新しい成果が出ているそうです。中でも僕は一九五四年の中山修一氏による第一回目の長岡京跡の発掘調査について知った時、たいへん驚きました。中山氏が発掘調査に入る前の一九五〇年代、長岡京は「幻の都」と呼ばれていました。関係する資料は乏しく、調査は簡単には進みませんでした。しかし、地道な作業を続ける事なんと七年、中山氏はついに長岡京を掘り当てたのです。その調査を皮切りにその後何百回もの発掘調査が行われています。中山氏の人並み外れた情熱と根気の良さがなければ、長岡京の発掘には至らなかつたでしょう。僕は感じました。このような歴史上の新事実の発見は、きつとどれも中山氏のような苦労と情熱の上に成り立っているのだと。今の僕には根気が足りません。例えば意気込んで始めた趣味も辛くなったら、すぐやめたくなることがあります。そんな僕にとって、一生をかけて長岡京を発掘した中山氏の情熱は想像を超えるも

のでした。

向日市の「地名」と「発掘調査」この二つのことから、僕は歴史の持つ奥深さに改めて胸を熱くしました。歴史上の様々な文化がその長い時間の中でなぜ薄れず受け継がれてきたのか。それは、多くの人々の人生がそこにあり、その意味や面白さを、代々伝えてきたからなのです。また長岡京のように、一度廃れて幻となってしまうても、その事実を信じ、価値を見出し、血のにじむような苦労と努力で発見しようとする人もいるのです。そんな存在も、歴史の風化を止める力になると分かりました。つまり、歴史文化が後世に残るためには、「受け継ぎ伝える人」と「発見し伝える人」という二つの存在が必要なのです。

向日市という街に生まれて十五年、住み慣れたふるさとを見る目が今回の検定受検で大きく変わりました。何気なく歩いてきた丘が実は古墳だったり、何度も葉書に書いてきた地名が実は千年以上の長い歴史の中で育まれたものだったり。学べば学ぶほど生活が色鮮やかに、奥深くなっていく。それこそが歴史の面白さだったので。今回僕は向日市の歴史の一端に触れ、こんなにもこの街で暮らすことが楽しくなりました。僕は向日市民の一人として決意します。歴史を学び、歴史を受け継ぎ伝える人になることを。